

# 越境するメディアのなかの“中国”

インターネットが普及するようになって、中国のメディア界の変貌は著しい。発信のあり方が大きく様変わりしただけでなく、流通する情報やコンテンツも、またそれに対する規制の方法も変化してきた。それぞれの領域で中国メディアに向き合ってきた専門家が、今日の問題状況を語り合う。

古畑康雄

〈共同通信社記者・編集者、愛知大学現代中国学部非常勤講師〉× 渡辺浩平

〈北海道大学メディア・コミュニケーション研究教授〉×

房 満満

〈テムジン・デイレクター〉× 砂山幸雄

〈愛知大学現代中国学部教授〉 司会 高明潔

〈愛知大学現代中国学部教授〉

高 この座談会の企画は私が提案したのですが、このテーマに特に関心を持っている中国政治研究の専門家であり、愛知大学現代中国学会の学会長、砂山先生からいろいろアドバイスをいただいで実現できたものです。最初に砂山先生から座談会のテーマについてご説明ください。

砂山 では、私から簡単に問題提起をさせていただきます。

ここ十数年、インターネットとスマー

トフォンが普及するようになって、中国のメディア環境が非常に大きく変わってきました。それによって中国国内や日本のメディアで、中国に関する報道あるいは中国という存在の伝え方が変わってきているのではないかというのが私の最初の問題意識です。もちろんメディア環境の変化は中国国内だけではありません。フェイクニュースを含めてさまざまな情報が国境を越えて世界中を行き交っており、それらを一般の市民がスマホで簡単

に入手できるという状況になっています。そういう状況の中で、国民世論のレベルで日中関係を語ろうとすると、単に国境線で区切ってそれぞれの世論、例えば日本人の中国への親近感やイメージだけ分析しても、ちよつと物足りなく感じます。ネットを通じて日中双方の過激な言説が相手に伝わり、それがまた新たなハレーションを起こしていくというダイナミックな関係を捉えていないように思われるからです。



しかし、そうは言っても、国民国家としての枠は結構かたいのがあります。インターネットが普及した初期にはそれが市民の自由な言論活動を促進し、いざれ政治的な民主化の有力な武器になると期待された時期もありましたが、時間が経過して国の対応も固まってくると、インターネットといえども国家のルールに従わなければいけないということがはっきりしてきて、国家の壁を超えることは容易ではないということもわかってきました。この点は中国については特に重要です。日本と中国とはネット規制などの面で顕著な非対称性がありますが、それが日中両国の市民のレベルでの相互認識にかなり大きな影響を及ぼしているのではないかと考えています。

こうしたメディア環境の変化の中で、日本で中国はどのように伝えられているのか、またどのように伝えるべきなのか。やや漠然とした問題意識なのですが、これに関連するさまざまな問題について、それぞれ専門分野の立場からお話しただきたいと思います。最初に、中

国メディア界の変化について、渡辺先生から総括的にお話しくさいますか。

## 中国メディアの変遷

渡辺 いま砂山先生からインターネットあるいはスマートフォンというような話があったように、皆様そこに着目していると思うのですが、私は古い人間で、七〇年代に大学に入って、八〇年代から九〇年代にかけて広告業界で働いていたものですから、「そもそも」という話をさせていただいてから、それがインターネットにどうつながっていくのかということと、古畑先生にバトンを渡したいと思います。

しばしば中国のメディアは「党の喉と舌」、つまりプロパガンダであるというふうに使われています。中国共産党にとってメディアがプロパガンダだということは、古くは一九四〇年代の延安にまでさかのぼることができ、中国共産党にとって不変の原則であるということは、皆様ご承知のことと思います。

ただし、もう一つの側面で重要なのは、産業化です。これは一九九〇年代の市場経済化以降に起こった現象です。もともと中国のメディアは「事業単位」と呼ばれる国有の組織で、その運営費のほとんどは国や地方政府が支出していました。中国の計画経済は元来、収益を度外視していたので、メディア産業もその一つであったということです。しかし、九〇年代以降にメディアは急速に産業化を果たしていく。産業化の柱は広告です。し、広告収益をあげるためには、新聞であれば部数を増やす、放送局であれば視聴率を伸ばす、ということが必要になってきます。新聞を例にとると、各省、各市には党機関紙があるわけですが、それを冠とした报业集团というグループ企業が形成される。その傘下に都市報と言われる都市で読まれる新聞を置く。そこが広告収入を得ていくという構図が生まれます。

ここから言えることは、つまり本丸であるところの報道は党機関紙に代表されるメディアががちり握るけれども、周

辺部門は市場原理にゆだねて、そこで利益を得ていくということです。「党の喉と舌」という表現をしましたけれども、同時にそこでお金を稼ぐということが起こるわけです。このメディアの二つの属性が非常に重要なのではないかと考えています。特にインターネットの場合、民間企業から始まり、影響力が始めると、政府が介入していく。中国の状況を見ると、「党と市民、民間が対立している」という図式で見ることがあります。メディアにおいてはそうとは言えず、民間の活力を使いつつ、それが影響力を持ち始めると、党がそこに介入し、民間も党、政府の力を利用して、発展するという図式も見えます。そのような意味で、産業化、市場化というのは重要な側面だと思えます。そこには当然、消費能力を備えた消費者という存在がある。彼ら彼女たちが市場化されたメディアを通じて情報を享受する、それがインターネットが発展していく前夜の風景だと考えています。

砂山 ありがとうございます。メディア

の産業化、市場化についてのお話ですが、新聞についていえば、新聞に広告が登場し、各地で「都市報」（市民向け商業紙）だとか「晩報」（夕刊紙）とかが続々登場してきた時代が思い出されます。そうした新しい新聞の中でも、例えば『南方週末』に代表されるような南方日報系のメディアが調査報道やリベラルな論調を展開して、よく売っていたように思います。それはやはり南方集団の拠点である広東省の状況を反映していたのでしょうか。

渡辺 そのことは中央もわかっています、ある種それを許しているところもあったと思います。鄧小平の改革開放にしても四川省から始まります。周辺部分からそろりそろりとやっていくというのが、中国の改革の常道です。中央に影響を与えない限りにおいて、遠方で多少自由化をはかるのは問題ない。ただ、一線を越えると、地方政府も締め付けにかからざるを得ない。一つの節目が、二〇一三年初めに『南方週末』で起こった「中国の夢、憲政の夢」という社説が差し替えられた



..... 古畑康雄[Furuhata Yasuo]

事件かと思えます。

古畑 いま愛知大学で担当している授業では、最初にまず中国の伝統メディアの発展の話をしています。その広東省の特に南方報業伝媒集団（南方報業メディアグループ）が、どうして一九九〇年代から二〇〇〇年代前半に大きな影響力を持つていたかという点、いくつかの理由があります。これは現地で直接、『南方都市报』や『南方週末』にいた記者から二〇〇五年に聞いた話ですけど、第一に香港に非常に近いということで、香港に



古畑氏著書、勉誠出版

は当時、非常に開放的な言論の自由があり、その影響を受けやすかったこと、第二に広東省は非常に経済的に発展しており、日本の企業も一九九〇年代からホンダやトヨタなどの大手が進出し、経済的蓄積があるので、広告などさまざまな需要によりメディアが発達する条件があったこと、それから第三に広東省はメディア間の競争が激しく、例えば広州であれば『広州日報』、『羊城晚报』、それから南方系、その三つのグループによる競争が激しいので、面白い記事を書かないと

新聞が売れないという状況があって、市場化されたメディアが非常に発達したとのことです。

『南方週末』の話が出たので、ついでに話をしますと、『南方週末』で新聞部主任という編集責任者をしていた長平さんという友人がいて、『南方週末』でいろいろなスクープ記事を書いた著名なジャーナリストですが、現在は中国のメディア規制が強まった結果、中国にいられなくなって、ドイツに住んでいます。彼がどのように新聞記者の道に入ったのか、そしてどういう仕事をしたのか、そして、言論空間がどうして狭まっていったのかという点を、彼が口述する形で、『チャイナ・チェンジ』というサイトに発表しました。私はそれを日本語に翻訳してくれないかと彼から頼まれ、今年（二〇二一年）の三月ごろに全訳し、それが福岡の集広舎のウェブサイトに載っています（<https://shukousha.com/feature/9452/>）。南方系のメディアが活躍した非常にいい時代があったのですが、言論統制により衰退していった理由を当事者だった彼が詳

述していますので、是非お読みになっていただければと思います。中国語版と英語版も同サイトにリンクを貼っています。

## ネット時代の中国メディア

高 渡辺先生にはネット時代前後のころまでお話しいただきました。それ以後の時代について、古畑先生からお話しただきたいと思います。

古畑 私は共同通信社の記者、編集者をしているのですが、二〇年ぐらい前から中国のメディア動向について関心を持ち始めて、渡辺先生らと一緒に、一〇年ほど前に『中国ネット最前線』（蒼蒼社、二〇一一年）といった本を出したり、先ほど申し上げたように二〇〇五年に広州や北京の都市報を何社か訪問して、その当時の発展の様子を霞山会の『東亜』（二〇〇六年七月号）という雑誌で報告したりしました。本業の傍ら中国のメディア、特にネット世論の動向や、日中関係とネット世論との関わりなどについ

て関心を持ち、数冊の本を出しました。いま愛知大学でも、中国のメディアやネットについて講義をしています。ネットが中国社会に与えた影響について述べる前に、まずネットが登場する以前の状況について話してみたいと思います。

中国の有名なメディア研究者、孫旭培先生の『中国における報道の自由——その展開と命運』（高井潔司ら訳、桜美林大学北東アジア総合研究所、二〇一三年）の中で、孫先生はメディアをめぐる二つの思想を紹介しています。その一つは、「民主主義の報道思想」であり、報道するということにおいて人々は平等であり、誰もが言論と報道の自由を有し、大多数の人の話す権利だけでなく、少数の人の話す権利も保障しなければならぬという、西側の報道思想です。これに對して「エリート主義の報道思想」というものがあり、これは言論と報道の自由は一部の人の社会的エリートが享受すればいいという考え方であり、その他の人は享受できないし、またすべきでもない

という考え方であり、中国など共産主義国家の報道思想だと指摘しています。情報を入手し、発表する権利において、政府と国民は平等ではない。いわゆる「由らしむべし、知らしむべからず」という発想です。

孫先生は、ニュースの報道には三種類ある、それは「新聞」「旧聞」「無聞」だという毛沢東の言葉を紹介しています。これはつまり、政府は意図的に国民に知らせる情報を操作し、社会の安定や政権の維持に不利となる情報はわざと遅らせて伝える（旧聞）か、あるいは全く伝えない（無聞）といった情報操作を行うべきだという考え方でした。こうして情報が国家権力と個人との間で極めて非対称な状態にあり、国民はそういう情報を入力する権利、あるいは自分の身の回りの問題や自らの考え方を発表する権利がない状態が中国で長く続きました。こうしたなかで大躍進や文化大革命といった大きな問題が起きてしまったということに、国民の間に十分な知る権利、あるいは自分たちの置かれている状況や、意見



を発表する権利が保障されていなかったことが影響を与えていたということを孫先生もおっしゃっています。

一九八〇年代に改革開放の時代に入ると、報道の権利を保障する「新聞法」制定の動きもあったそうで、孫先生もその法案起草メンバーの一員として、実現に向けて努力しましたが、天安門事件でその試みも頓挫し、その後この法律の制定の動きは起きていないとことです。しかし、ここは渡辺先生の話と繰り返しになりますが、改革開放後に市場経済の流れがメディアにも波及して、都市報、晩報などの市場志向、読者志向の新聞が生まれました。この大きなきっかけは天安門事件後、鄧小平が一九九二年の南巡講話という形で、政治的な統制は維持しつつも、経済を自由化させるという、市場経済の方向に大きく舵を切ったことで市場志向のメディアが大きく発展し、それによって人々は初めて、自分たちが本当に知りたい情報を伝えてくれる、あるいは本当の自分たちの声を取り上げてくれるメディアというものにアクセスする

ことができるようになりました。

二〇〇三年に起きた有名な「孫志剛事件」、これは広州市で服飾デザイナーが都市居住証を携帯していなかったため、ホームレス収容施設に入れられそこで暴力を受け死亡した事件ですが、この事件の解決に都市報やネットが大きな役割を果たしました。中国でインターネットが本格的に普及し始めたのは二〇〇〇年代に入ってからです。わたしは一九九〇年代後半に北京に留学しましたが、当時はネットはほとんど普及しておらず、九八年に中国のインターネット人口はわずか六二万人だったそうです。それが二〇二〇年には九億四千万人になっています。で、約一五〇〇倍と、恐るべき発展をしました。そして、この爆発的なネット人口の増加が中国の社会にもたらした最大の変化は、「世論」の誕生だと私は考えています。

つまり、政府との関係で情報の非対称の立場にあった、弱者の立場にあった人々が情報を得る手段、発信する手段を得て、それが多様化し、さらに人々が特



2018年上海にて（古畑氏提供）

定の問題について議論する場が生まれたということ。中国は日本と比べても非常に国土が広い国ですから、それまでは多くの人がある一つの問題に注目し、議論するというような場がなかったのですが、ネットの出現により地理的な制約を乗り越えた言論の場が生まれたのです。その結果、政府の提供する情報や見方とは異なる民間の世論が生まれ、政府

が作り出そうとする世論と、民間から生まれた世論という二つの世論が対立するようになりました。特に地方政府の幹部の腐敗あるいは横暴などについて、その被害者が広く社会に訴え、人々がこれに共鳴して政府を批判するという、そういう大きな流れができました。

これについて、先ほど述べたジャーナリストの長平さんは「ネットは弱者の武器である」と語っていますが、まさにそのことを示しています。ネットが大きな世論を形成した典型的な事件が二〇一一年の高速鉄道事故ですね。「微博」はまだサーブिसが始まって間もない時期ですが、列車に乗っていた人が事件の発生を政府系のメディアに先駆けて伝えました。その後は、事故原因を曖昧にしようとする車両を土の中に埋めようとしたという有名な映像が残っていますが、ネット世論はこうした鉄道省の対応を批判し、被害者も含めて真相究明を求める大きな世論の波を作りました。都市報や雑誌など伝統メディアもこれに加わりました。

このあたりの経緯は、当時NHKの

「クローズアップ現代」が放送した「『ネット反乱』の衝撃」中国鉄道事故の舞台裏」という番組が詳しく取り上げられています。さらに、微博では「大V」と呼ばれる、「網絡意見領袖」（ネット・オピニオンリーダー）が登場して、社会問題などへの見解を微博を使って発信し、世論形成に大きな力を持つようになりました。

共産党政権は当時、自分たちの、先ほど渡辺先生のことばに出てきた「党の喉と舌」だった政府系メディアによる言論統制がネット世論の台頭によって困難になったことに危機感を感じ、習近平政権が登場した翌年の二〇一三年ごろからネット世論の統制の強化を一気に進めました。

胡锦涛時代にも、「普遍的な価値」とか「報道の自由」「公民（市民）社会」などについて大学で教えてはならないという、「七不講」（七つの話してはいけないこと）や、ツイッター、フェイスブック、ユーチューブなど海外のウェブサイトやSNSを遮断する「防火長城」（グ

レート・ファイアーウォール、GFW）などの規制がありました。二〇一三年ごろからは例えば「微博は海外の敵対勢力が中国政府を転覆させるための手段であり、国内のオピニオンリーダーはその手先である」とか、「彼らに対しては生きるか死ぬかの闘争をしなければならぬ」といった文革を想起させるような厳しい文言も新聞の社説などに登場しました。大Vの一部は買春などの疑いで逮捕され、テレビ番組で「罪を犯しました」と告白させられるなど、発言の場を奪われていきました。政府に批判的な声を厳しく取り締まると同時に、中国政府は「ネット主権」という言葉を、先ほどの砂山先生のご発言にもありましたけれども、ネットにも国境があり、どういう規制を作るかというはその国の政府が決めることであり、他の国は口を出す権利はない、と主張するようになりました。そして「世界インターネット大会」というものを毎年開き、その考え方を世界にも広めようとした。

本来、比較的オープンなものであった

インターネットが徐々に自由な発言の場が奪われ、閉鎖的な空間となっていくなかで、若者を中心に「中国は素晴らしい」というような愛国主義、ナショナリズム的な思想が徐々に広がっていききました。そして政府を少しでも批判しようものなら「売国的な言論」と、日本の戦時中の「非国民」のようなバッシングを受けるようになりました。

最近よく言われている「小粉紅」<sup>(1)</sup>など若者に広がる愛国主義の風潮は、そういうネット空間の変化がもたらしたものだといえると思います。砂山先生が『中国年鑑』（中国研究所編、二〇二一年版）にも書かれていた、「武漢日記」を書かれた方々さんに対する批判もその一つの場合ですが、中国に不利なことを欧米に暴露したとして、彼女は批判にさらされました。こうして「中国真厲害」、中国は素晴らしい、中国のやり方は正しいというナショナリズムの言論が大きな力を持つようになりました。私は決して各国の人々が愛国心を持つことを批判するものではないですが、人々が情報を得たり、

発言したりする権利が制限される一方で、政府がすばらしいという政府賛美だけが許される言論環境はやはり不健全ではないかと思っています。

この二〇年間の中国のネットを中心とした世論環境の変化を短くまとめると以上のようになります。

### ネットに期待が寄せられた時代

砂山 インターネットを使って比較的自由な言論が広まったのは、二〇〇〇年の初めぐらいから二〇一〇年代初めにかけての時期かと思います。このころはインターネットがこの先、中国の民主化を促進するという期待を抱かせましたね。

古畑 当時は政府の規制が後手に回ったのも一因だと思います。例えば大きな事件が起きた時に、地元政府の人が記者会見を開いて事件について説明するのですが、その説明が非常に下手で、かえって疑惑隠しではないかと批判を受け、炎上したことがあります。他にも、二〇〇九年にネットの有害な情報をブロック

するために「緑壩」(グリーンダム)というソフトをパソコンに強制的にインストールしようとしたところ、ネットで批判が高まり、「緑壩娘」(グリーンダムガール)という女の子の画像や動画がネットで広がるなどして、その計画が頓挫した事件というかお祭り騒ぎもありました。このように当時の政府の対応というのは、ネット世論の拡大に追いつていなかったと思っています。二〇一三年ごろの急激な締め付けの後、政府の方も例えば、砂山先生が『中国年鑑』(二〇二〇年版)でも指摘された、政府寄りの発言をしてくれるような民間のネットユーザーを養成するなどの形で、徐々にネットの主導権を取り戻すということが結果的に進み、今やそういう形で政府を支持する世論が主流になったと考えています。

砂山 二〇〇〇年代には、SARSの問題や『氷点』週刊の事件<sup>(2)</sup>があり、中国の報道ももう少しオープンにして、いろいろな情報を、これはネットだけでは提供しきれなくても、活字のメディアも含





渡辺浩平[Watanabe Kohei] .....

めて、もうちょっと、言論を開いていこうという風潮があったようにも思いません。その点はどうでしょうか。

渡辺 また古い話をする、胡錦濤政権ができたときに、宣伝担当の政治局常務委員・李長春が「三貼近」（三つの接近）という方向性をだしました。三つの接近とは、実際、大衆、生活を重視するというものです。同時にテレビニュースの指導者の報道を何分以内にしろ、という制限をかけました。いまの習近平報道とは全く違う、市井の人々が関心のある



渡辺氏著書、講談社現代新書

ニュースを多く流せ、という方針です。それによって「メディアは変わるんじゃないか」という期待が高まった。そこに、SARSが流行し、報道の方向性が変わってしまう。前総書記の江沢民の横やりがあったのではないかと囁かれていました。

二〇一一年に海南島の海口にある「天涯社区」を訪ねたことがあります。「社区」というのはネットにおけるフォーラムです。当時、天涯にはかなり自由な書き込みがあったので、当局からの指示は

ないのかと聞くと、「海南省政府からはあるけど、中央からはない」という答えでした。ネットが誕生した時には、かなり自由な空気があった。ネットベンチャーは、一部の地域に集中していました。テンセントも深圳からですし、南方や北京の中関村から、いくつかのネット企業が誕生していました。中国は二〇〇一年に世界貿易機関(WTO)に加盟し、世界市場とつながる。当然、インターネットという新たな技術の開発も求められる。そのためには民間の力を活用せねばならない。インターネットにおける言論も影響力がでない範囲においては、それを認めて、軽視ができない状態になると、締め付けに入る。むしろ、ネット企業には、国内市場における寡占化というエサも与えつつ、そのコンテンツには制限をかけるといことが生じたのではないかと考えています。

古畑 あと、一点だけ補足すると、江沢民政権の頃はまた、メディアによる「世論（による）監督」というものを認めていた時期がありましたよね。

渡辺 ありましたね。朱鎔基首相は、地方政府の不正の摘発などの報道で知られた中央電視台（CCTV）の報道番組「焦点訪談」を「世論監督、人民喉舌、改革尖兵」という言葉で誉めていました。古畑 当時はメディアを使って、要するに民の声を通して政治を監視するという思想が指導者の間にもあったように思いますね。

砂山 房さんはそのころの記憶はいかがでしょうか。

房 私は二〇一一年に日本に来ました。先生方がおっしゃっているようなスタンスなどは、まだ中学生だったので記憶にはありません。当時ひとつ覚えてるのは、CCTVの王志という司会者がいて、彼がやっていた「対話」という番組がありました。医師の対談番組で、感染状況の隠蔽が行なわれていることとか、実際SARSはどれだけでも蔓延しているかという事実を初めてCCTVが報道したのをすごく覚えてます。親もびつくりしていました。そのうち王志が左遷されてしまって、消えたということも記憶



.....房 満満[Fang Manman]

憶にあります。

砂山 当時、中国共産党の中でもメディアのあり方についていくらか意見の違いがあったのかなとも思いますが、よくわかりません。最近、中国人留学生と話している、江沢民を褒めるんですね。私が江沢民時代は腐敗汚職が蔓延して民衆の評判はよくない時代だったと言っていると、「ちよつと先生それは違う」などと言われます。今の息苦しい中国の状況においては、ある種自由が感じられた時代として回顧されるところもあるように

すね。

高 はい。ありますね。

砂山 ある程度メディアの統制を緩めても大丈夫というか、むしろそれを一種の手段にしていたのかもしれない。しかし、私の印象では胡錦濤政権の後半ぐらゐから徐々に規制が強まって、習近平時代になって、がらつと変わってしまったという感じです。いずれにしても中国のメディアを一括りに党の統制下にある、というのは簡単すぎると思います。というわけで、次にメディア規制の話に入ります。

### メディア規制の問題

渡辺 二つだけ補足をさせていたください。江沢民時代の一九九七年頃から愛国主義教育が始まっていく。メディアに対する統制を多少緩めつつも愛国主義を喧伝していきます。もう一つ、先の寡占化の問題です。ネット企業が、例えばゲームやデジタルコンテンツで利益を上げていくときに、海外の創作物を模倣する。

中国が閉ざされた市場であるからこそ、それができるわけです。ある意味で共産党とネット企業とは「共犯関係」なんです。利益機会を与える、だから言うこと聞け」といったことが起こる。

同時にネット企業は、言論のプラットフォームを作っていく。時に、そのネット世論が当局の政策に揺さぶりをかけることもある。両者は微妙な関係でもあるという認識を持っています。だから、ネット企業が巨大化した時に、そのトップを威喝する。すなわち、テンセントの馬化騰や、アリババの馬雲を排除する動きにもなるわけです。二〇二一年一〇月八日に、国家発展改革委員会が二〇二一年のネガティブリストを発表して、そこに非公有制資本が報道の領域に入れないことをうたっていました。民間資本が報道の領域に参入できないのは中国共産党の一貫した政策ですが、ただ胡錦濤政権時代は、非公有制を入れないというよりも、どこを産業化できるか、ということが明確化されていた。それによって、メディアにおける周辺部分の市場化がは

かられました。時代がすすむに連れて、表現の仕方が変わってきた。いずれにしても中国においては、外部資本のどこまでがメディアの中心領域に参入できて、どこまでが入れないかという線引きがかなり恣意的になされるので、それによってメディアの萎縮効果が起こる。共産党が言えば、それがルールだということになる。

また、同じ頃に、ネットがニュースを転載してもよいメディアのリストが発表されましたけれど、そこには『財新』や『経済観察報』は入っていません。『財新』は調査報道で有名なメディアです。トップが胡舒立さんという方で、北海道大学にお呼びし講演をしていただいたことがあります。ただ『財新』も習近平政権ができたときに反腐敗の論陣をはる。それは、党中央規律検査委員会書記の王岐山の動きと平仄を合わせたものでした。つまり、『財新』と習近平政権の関係も微妙なものを持っています。ですから、そのところは二項対立でとらえられない部分があると思います。



『カミングアウト 中国・LGBTの叫び』取材 2018年(房氏提供)

高 房さんはいかがですか。実際にメディア・コンテンツの制作に携わっている立場で、中国のメディアの変遷やメディア規制についてどうお考えですか。房 二〇〇八年にNHKの有名な「激流中国」という、北京オリンピックを目前に控えた中国に取材し、農民工、都市農村格差、医療問題等、中国が抱える深刻

な社会問題を描いた一三回のドキュメンタリー・シリーズがあり、私もなんども拝見しましたが、そのときは外国メディアは比較的自由に中国を取材できたように思います。北京オリンピックを控えている中国は、海外メディアへのある程度自由を与えていたかもしれないですね。

私はそのとき大学一年生で、四川大地震が起きた年でもありません。ネットでは、多くの子供が犠牲者になった学校を調査する人がたくさんいたと思うのですが、その人たちが最初は発言ができていたのが、徐々にできなくなつて、ごく制限されていってしまったんだなと思つたことが記憶にあります。

私は愛国教育というものを受けて育つたので、ネット規制があつて当たり前というふうに通つていたのですが、違和感を覚え始めたのは二〇〇八年の大地震のときでした。最も強く規制を感じたのはコロナのときですね。去年（二〇二〇年）の二月ぐらいまでは、李文亮<sup>（3）</sup>さんが圧倒的にヒーローとしてみなされて、隠蔽ということへの怒りを一四億人みな

共有しているんじゃないかと思うぐらいで、本当に私も中国が変わるかもしれないとすごく希望を感じていたのですが、でもそれが今では全くなくなりました。

ですが、言論空間には希望がないというわけではないと思います。最近ポッドキャスト「小宇宙」というものを愛用しています。音声メディアの力はすごいなと感心しています。というのは、映像は出ませんし、文字としても存在していないので、規制がかけられる可能性が比較的低いんですね。喋り終わつたらそれで終わつてしまうので、みな比較的自由に語れているような気がします。

フェミニズムであつたりとか、LGBTであつたりとか、ナシヨナリズムへの反抗であつたりとか、そういつたことに對して、みな顔を出さなくていいということ、安心してしゃべっています。そのメディアを作っているのは若い世代で、それを強烈に支援している人たちも若い世代の人。個人的にその子たちから希望を感じたいなとは思っています。

## 言論空間の変化

砂山 今の房さんのお話の中でそうかと思つたのは、音声は意外とうまくコントロールできない領域だということです。映像は残る可能性が高いのに對し、音声は消えてしまいがちということでしょうか。

房 映像はもちろん顔も残つてしまいませんし、文字も遡ろうと思えば、いくらかも遡れるわけですから。彼らもすぐくうまいことに、文字に起こす音声と起こさない音声があるんですね。

砂山 なるほど。

房 若い世代はとも洗練されてきていると思えます。自分みたいに海外のメディアで働いて、海外で見た中国を中国国内に伝えたいとか、そういうタイプが非常に多いですね。

高 メディア規制について砂山先生はどう思いますか。

砂山 私はこれまで主に中国の雑誌に掲載されたいろいろな論説を読んで、それ

で中国の世論動向を分析するという研究をやってきました。これは今ではなかなか難しいというか、あまり流行らない研究領域になりましたが。そのなかで海外の多くの研究者が注目したのは、一九九〇年代後半に展開されたいわゆる自由主義派と新左派の論争です。これは中国の公開刊行されている雑誌上でも展開されて、二〇〇〇年代の初めぐらいまで続いています。今から振り返って、どうしてあのような論争が許されていたのかを考えると、やはり当時、市場経済の導入、国有企業改革が強力に進められていて、そういう共産党の政策推進に対して、賛否を含めてですけれど、こうした論争自身が割と役に立つというのか、党内の政策をめぐる議論とある程度連動していたという側面が強いのかなと思います。

だからメディアの比較的自由に見える空間というのも、ある種利用される空間でもあって、利用が終わってしまうと、もう要りませんとばかりに規制が強化されるように見えます。習近平時代になつて考えると、あの頃の言論空間というの

は、党からある種許された空間だったといえるかもしれません。

先日、日本現代中国学会の全国大会で、中国専門家ではありませんが、インターネットと政治のあり方の関係を研究されてこられた山本達也氏（清泉女子大学教授）の報告を聞きました。山本氏によると、二〇一一年にアラブの春、ジャスミン革命があり、それが東ヨーロッパの方にまで広まって、ネットの力で政治を変えることができるという期待が高まった、と。しかし、中国ではご存じの



砂山幸雄 [Sunayama Yukio] .....

とおり、あつという間に潰されてしまったわけです。今や世界においてインターネットを規制し、コントロールする最先進国は中国で、世界各国は中国をモデルにしているのだそうです。そういう点では、インターネット規制に関して、中国が突然方向転換したというより、おそらくインターネットの導入からどうやってこれを利用し、コントロールするかということを共産党は考えていたと思います。先ほど申しあげたとおり、当局にとってインターネットをコントロールする体制が確立できれば、もう放置してよい空間はあまり大きくなってきたと判断したんじゃないでしょうか。

古畑 それで言うと、胡锦涛時代なんかは、地方政府の役人の腐敗とかをネットによる告発を利用して取り締まっていたというようなことがありますよね。例えばある地方政府の役人が高級腕時計をしている写真がネットに出て、なぜこんな腕時計をしているのかと、そこからいわゆる「人肉捜索」が始まって、汚職の摘発につながるなど、中央政府も自分たち



の目の届かない地方の腐敗とか、強制立ち退き事件とか、そういったところからみられる地方の幹部の横暴とかを知るためのアンテナとしてネットを利用していた時期もあったと思います。しかし今はその監視ネットワークが非常に完全なものとなったので、いわゆるネットからの告発というのは必要ではなくなつた、その結果、ネット世論を取り締まる側に方向転換したという面もあると思います。

古畑 一つだけ房さんに質問したいのですが、先ほどのポッドキャストの話なのですが、大多数の若者がどうしても政府の愛国主義教育の影響を受けるなかで、そういったものに反対するということか、自由な考え方を持つ若者も一定程度いるということですが、彼らはどうやってそのような考え方を身につけているのか、LGBT等々含めて、どのように情報を得て、思想形成がされ、そういう発信をしているのか。個人的に非常に関心があるので、お聞きしたいのですが。房 私は日本に来て初めて、自分の国がこういう国なんだとわかつたような気が

します。外国に行つて、外国の情報を手に入れるというのは、違う思想に触れる一つの道かなと思います。LGBTとかマイノリティの話でいくと、例えば周りに当事者がいるとか、自分自身も当事者であるとか、そういうことで関心を持つ人も多い。やはりある程度教育水準が高い子たちが多いかなと思います。ただ、例えば北京大学とか清華大学の学生のかなにも、「小粉紅」よりも真つ赤な子たちと、全然そうではない子たちのギャップはどんどん広がつてきているような気がします。別次元で生きていくというふうには私は感じます。自分自身も含めてですが、小粉紅のことを理解しようなんていう努力は最近あまりしなくなりましてね。

砂山 「真つ赤」と小粉紅はそんなに差があるんですか。

房 小粉紅という言葉は、たぶん五、六年ぐらい前からですが、当時の小粉紅とは日本という「ネットウヨ」のように受け取られていたと思うんですね。最近では小粉紅がわりと主流になり、逆にこの

子は全然赤くないなあというのが、珍しくなりました。日本も中国もアメリカもそうですけど、ナシヨナリズムの高揚について私は強い関心を持っています。

砂山 小粉紅は体制派で、赤い方はむしろ体制に批判的なんだという話を中国の学生から聞いたことがあります。政府のやることをなんでも肯定するのが小粉紅だと。ネットユーザーも変わつてきたし、政府自身も変わつてきたということなのかもしれないですね。

房 世界中のコロナの状況を見て、多くの若者が本当に中国はすごいと心から思えるようになってきたというのが、事実だと思えます。

渡辺 例えば、海外に行つて逆にナシヨナリスティックな感情、民族感情が強くなる場合もあるじゃないですか。日本なんかの場合もそういうところがありますよね。海外に出ると「日本がたまらなく懐かしい」、「日本の良さを再発見した」、そういうことは往々にしてある。海外に出て民主主義の価値に目覚める中国人もいる。逆にアメリカに行つてアメリカ嫌

いになり、中国の政治体制を誉め始める人もいる。その境目は何なのでしようか。房 個人的な分析というか周りの状況を見て思うのは、その人がどこまで現地社会に溶け込んでいるかによると思っています。どこに行っても中国人同士で付き合っただけだと、どんなナシヨナリズムが高まってもいけません。逆に、言葉の能力も含めてですが、現地の人对自己に対して遠慮なく中国のことをこう思っていますよというような会話がでるぐらいの付き合い方をしているか、あまりリベラルにはなかなかならないのかなと思っています。古畑 それに関して、以前書いた『習近平時代のネット社会——「壁」と「微」の中国』（勉誠出版、二〇一六年）という本の中で、『中国の歴史認識はどう作られたのか』（東洋経済新報社、二〇一四年）を書かれたワン・ジョン（汪錚）という在米の学者にインタビューしたことがあるのですが、海外に留学した中国人学生が何で中国政府を積極的に支持するのかと聞いたら、一つはまず中国人は非

常に集団的な文化というのが強くて、中国政府に対する批判を自らに対する批判と考えがちであり、自覚的にもしくは無自覚的に中国政府を擁護しようになると、さらに外国の中国に対する評価は確かにちよつと誤解があると指摘されました。

もう一つの理由は、海外に留学する中国人は比較的豊かで社会的な階層が高い、だから社会に対する満足度が高い、彼らの両親というのは政府の幹部で既得権益層、しかも一人っ子育ちで小さい頃から両親に守られて社会の厳しさに本当に接したことがなかった。そのため彼らの中国に対する理解というのは一面的で、中国に残っている人と比べると生活の困難とか職探しとか病院探しの困難、そういうことを知らない。この先生が米国の大学で接する多くの学生も確かに愛国的で、そういう傾向があると言っています。ただ彼らもやはりアメリカや日本に暮らすなかで考え方が変化することなので、たとえ大学にいる間に変化はなくても将来的にはもつと全面的に中

国というものを見られるようになるだろう。だからワン・ジョンさんは長期的に見て中国は開放的になる、多面的な見方をしようになることを楽観していると言っています。

高 若い世代の愛国心という話題も社会階層を分けて考えたほうがいいですね。それでは次の話題に入りましょう。

### メディアの「走出去」をめぐる

高 中国メディアの「走出去」の戦略について、渡辺先生からお話してください。渡辺 新華社はアフリカで支局数トップです。新華社はご存じのとおり英語で記事を書いて、配信している。東京の支局でも英語で書いてそのまま英語で配信しています。新華社の契約料は当然、先進国の通信社より安い。発展途上国、第三世界における新華社の影響力は決して軽視できるものではないでしょう。

欧州と米国にある中国語メディアを取材をしたことがあります。そのときにドイツで長平さんとも会いました。ドイ

ツだと、対外的な国営メディアとして、「独国之声」（ドイツチエヴエラ）があり、彼もその中国語版に原稿を書いています。当然、長平氏は陰に陽に中国政府から圧力をかけられる。放送局も同様に、さまざまなルートを通じて圧力を受けます。ドイツはヨーロッパで大きな影響力のある国ですから、その中国語による対外宣伝が、少しでも中国に対する批判的なトーンを低下させてくれれば、中国としてはありがたいわけです。長平さんも厳しい状況にあることがうかがえました。

古畑 新華社のアフリカ報道はすごいですね。私が今やっている仕事は外電を毎日チェックして、その中から翻訳しているのですが、アフリカ関係のニュースは新華社の情報量が非常に多い。ある国の地方で起きた事件事故から、中国の新型コロナウイルスのワクチンがそういった国々に入ってきているとか、中国の一路関連とか。新華社のアフリカ報道というのは、もちろん中国のメディア戦略、プロパガンダ戦略に沿ってやってい

ると思います。

砂山 国際報道という観点からいくと、マスメディアでもネットでも中国の報道量は非常に多いですね。日本は新聞で言えば国際面ぐらいしかなくて、本当に限られていますけど、中国はネットの記事で見るとアフリカとかラテンアメリカとか中央ヨーロッパとか、日本があまり関心を持たないところまで大量に報道しています。ピューリサーチセンターの世論調査を見ると、「中国に favorable ですが、unfavorable ですか」という質問に対して、アフリカとか中欧、東欧では中国に好意的な世論の割合が予想外に高いです。あれは中国国内の報道量だけでなく、向こうに対して発信する量も多いことの影響もあるのではないのでしょうか。日本を含めて先進国に対しては、中国メディアの「走出去」は成功していないように思いますが、成功しているところもかなりあるということですよ。

## ソフトパワーの追求

高 メディアの「走出去」は中国のソフトパワー戦略と密接に関係していますね。渡辺 ちょうど胡錦濤政権の後半あたりから、ソフトパワーが強化されていきました。二〇一〇年の六中全会で「文化強国」という方向性が出る。当然、文化強国を建設するためには文化産業を育てる必要がある。そのためには資金を提供するファンドが必要だという議論になります。上海のメディアを統合したグループ企業に、上海メディアアグループ（SMG）というのがあり、そこを母体としてチャイナメディアキャピタル（CMC）というファンドができました。その周辺を取材をしたことがありました。メディア王のルパード・マードックは中国のメディア業界への参入の機会をうかがっていたけれど、結局果たせなかつた。結果、マードックは、自身の持つ香港のテレビ局をCMCに売却しました。また、CMCはアメリカの制作会社・

ドリームワークスと共同で、「東方夢工場」(オリエンタル・ドリームワークス)という制作会社を立ち上げます。ドリームワークスはスピルバーグが創立者に加わったアニメの制作会社です。その最初の作品が「カンフーパンダ」の第三弾で、それを上海郊外の東方夢工場スタジオで制作するというのです。

CMCとドリームワークスとの合併は、その後、資本関係は解消しますが、ただ合作は続いており、二〇一九年には「Abominable」、中国語名では「雪人奇縁」、邦題は「スノーベイベー」という作品を制作します。二〇二〇年には「Over the Moon」、中国語名は「飛奔去月球」、邦題は「フェイフェイと月の冒険」というアニメを制作します。どちらも、ネットフリックスで観ることができ、そのつくりは、デイズニアアニメと似ている。でも、物語の舞台は中国です。両者とも上海近郊から始まる。前者はエベレストから連れてこられた幻の動物・イエティをエベレストに返すという冒険物語です。後者は「嫦娥奔月」の故

事を出典としたもので、月への旅を描いたものです。そのような中国の物語が、米国のアニメの味付けで描かれ、それがネットフリックスで放送されている。その資金は、上海のメディアを中心としたルートで集められたものです。

習近平が二〇一八年の宣伝思想工作会議で以下のようなことを語っています。

「国際的コミュニケーション力を高め、中国の物語を巧みに語って、中国の声を伝え、世界に真実の中国を示し、中国の文化影響力を増強する」といった趣旨の発言です。まさに、これらの作品などは、そのような方向性にあるのではないかと思えてきます。ネットフリックスやプライムビデオなどを見てみると、中国の歴史ものがラインアップされている。それを視聴者が見ているわけです。中国のSF作品『三体』が世界的なヒットをとげた。つまり、中国のコンテンツは、現代のことはうまく描けないけれど、過去と未来は描けるし、その創作力は向上していると言える。この問題と、先ほどのメディアの本丸、つまり報道の

部分は強いコントロール下にあるという問題とをならべて、どのように考えればいいのかというのが私の素朴な疑問です。メディアの制作力の向上は、軽視できないことでしょうか。

高 砂山先生はいかがですか。

砂山 ひと頃、日本で韓流は流行るけれど、華流はダメとも言われていましたが、最近はテレビドラマでもかなり健闘しているようです。アニメでも、中国のアニメ制作のレベルが非常に上がっていることはよく知られていると思います。だからコンテンツ制作の面だと、確かに非常に向上していることは間違いない。しかし、他方では、中国に対する印象が一向に良くなるらない。つい最近公表された言論NPOの日中共同世論調査では、また悪くなっています。日本は国際的にも極端なのかもしれないですけども、コロナの影響もあって中国に対するイメージは世界各国で軒並み悪くなっています。その意味では、コンテンツは良くないのに、ソフトパワーは向上していないというのが現状でしょう。

しかし、中国の当局も、仮にコロナ禍がなくても中国が国際的に決しているイメージを持たれていないという認識はあるように思います。先ほど渡辺先生は二〇一八年の習近平の発言を紹介されましたけど、習近平は今年五月末の政治局の学習会でも「信頼され、愛され、尊敬される中国のイメージを作り上げるよう努力せよ」と指示しています。これで「戦狼外交」も少し変わるかもしれないと日本のマスコミでも少し話題になりました。しかし、新華社の報道を読むと、中国がもつというイメージが持たれるように中国のメディアはがんばれという意味であつて、要するに責任はメディアにあるというところでしよう。なぜなのかと突き詰めて考えれば、メディアの問題だけではないことがわかれると思うんですけどね。しかしいづれにせよ、この間力を入れてきたソフトパワー戦略がうまくいっていないことは、習近平もかなり深刻に認識しているということは言えそうです。

房さんは日本でドキュメンタリー制作に従事されてきて、中国のコンテンツ制

作の面での現状をどのようにお考えですか。中国は日本や世界に一生懸命「中国」を発信しようとしているわけですが。

房 私はコンテンツを作る才能は中国に集まっているとは思いますが。ただその才能が規制のせいで発揮されていないというのはすごく残念なことです。例えば最近、韓国のドラマ『イカゲーム』が流行っているんですが、中国でもネットで小説を書いている子はたくさんいて、その小説を読むと『イカゲーム』よりも全然優れている文章がたくさんあるにもかかわらず、それが審査で結局落ちてしまつて翻訳されることなく、翻訳されないどころか中国国内で広がることもなく、終わってしまうというのはすごく残念なことだと私は思います。自分が素晴らしいんだということを一方的に訴えたところで何の意味もなく、むしろ逆効果でしかないのではないかと。自分の国の問題をコンテンツに織り込んで発信できてはじめて、「中国は変わったな」と世の中の人は思ってくれるのではないかと思います。



『カミングアウト 中国・LGBTの叫び』取材先で記念撮影 2018年（房氏提供）



## ドキュメンタリーの制作をめぐる

砂山 少し前にドキュメンタリー監督の竹内亮さんにオンラインでインタビューして、彼の考えもいろいろ聞きました〔本誌掲載〕。私が中国のドキュメンタリーの制作技術はどうかと尋ねたところ、もう中国のほうが圧倒的に進歩していると言っていました。日本は変わらなから、その点で遅れている、だから今、自分が日本に帰っても十分にやっつけると。だけど逆に中国を何年間か留守にしたら、もうついていけなくなるだろうとも言っていました。

房 それは言えると思います。コロナ以降、自分たちはあまりロケに行けていないので、現地で作ってくれる人として、カメラマンやディレクターを探しまくってました。いわゆる「舌の上の中国」が代表するような映像美だったり、機材のすごさだったりというのは、それはもう圧倒的に中国のほうが優れているんです。では何を撮っているかというと、や

はり綺麗な絵と格好いいインタビューしれないですね。竹内さんの言いたいことはよくわかりますけれど、ただやはり何を伝えたいのかという部分に関しては、私は中国は変わっていくべきだと思います。

砂山 その点、彼に日本のドキュメンタリーをどう思うんだと聞いたら、それはそれでいいと言っていましたね。中国には中国の中で撮らなければならぬものもあるんだと言っていましたから、彼はやはり中国人向けに作っているんですよ、基本的には。

古畑 古い話で恐縮ですけど、さつき房さんも言われていた「激流中国」が放映された当初、中国の政府はすごく批判して放送に圧力を掛けたりしたけれど、それに字幕を付けたものが中国国内のネットで流れると、多くの人が「なぜ我々中国のメディアはこういう作品が作れないんだ」と感激し非常に高く評価し、それをきっかけに日本に来て映像関係の仕事をしたいと言う人が結構いたらしいです。だからある程度いいコンテンツはや

はり、時代とか政府とかと一定程度の緊張感がないとだめだと思うんですよ。

中国は確かに太極拳とかお茶とか、西遊記とか、伝統的な文化の部分ではすごくいいコンテンツを持っていると思いますが、現実の中国をどう切り取って世界に流すかというところで、やはりどうしても政治的な手段の延長として考えているところが強いので、そこからちょっと離れて自由に作らせないと駄目だと思います。最近もある評論で『イカゲーム』があれほど世界的に流行したのに、『長津湖』は中国国内では大ヒットしたのに、なぜ世界に出られないのかと批判する文章を見つけました。やはりプロパガンダ色が強すぎて、中国の観客は「中国すごい！」と喜ぶ人もいるでしょうが、それがなかなか普遍性を持ってない理由をもうちよつと考えると、結局いくらお金を投資してもその部分は容易にブレイクスルーできないと思います。

高 全く賛成です。アメリカの大学に勤めている私の友人は、アメリカで制作された朝鮮戦争のドキュメンタリーと『長

「津湖」を比較して、描き方が全く反対であり、それは制作目的の相違だとブログに論じていました。

古畑 私もそのアメリカのドキュメンタリーを観ました。

高 房さんがおっしゃっているとおり、いくら制作力がアップし、コンテンツが良くても、根本の問題が解決しないと、発信力が全くないかなと思います。中国のソフトパワーはどこまで影響力を持っているのかと、正直なところ私も懐疑的な見方をしています。

砂山 『長津湖』に関しては、陳凱歌(ウ)があれに加わっているのはちょっとショックですよ。

古畑 残念ですが、立场上、中国政府への協力を拒むことができないのかもしれないですね。

砂山 いまの中国はみな主流化せざるを得ないんでしょうかね。

古畑 張芸謀もそうですし。

砂山 中国で「激流中国」シリーズのような社会批判の作品が作られて、日本では中国はそればかりじゃないよ、結構いい

ところもあるよという作品が作られればバランスがとれるんだらうけれども、いま日本で「激流中国」的な視点ばかりで描くと、逆に日本のテレビは中国の暗いところばかりを描いていると中国の世論を刺激して、「中国すごいぞ」的な作品が量産される、そういう悪循環のなかにあるように思います。やはりメディアの在り方における日本と中国の非対称性がこういう悪循環を生む根本にあり、そう簡単に変えられるとは思いませんが、中国が今後ソフトパワー戦略を見直すチャンスがあれば、こういうドキュメンタリーのあり方も変わってこないといけなんでしょうね。

### 日本から中国への発信

砂山 中国メディアの「走出去」に対して、海外のメディアのほうもインタネットの普及を背景に、中国に対して発信を強化してきました。この点は古畑先生が携わってこられた部分ですね。中国は日本に発信するし、日本も中国に向け

て発信してきたということで、この点について、まず古畑先生にこれまで携わられてきたことを踏まえて、お話を聞かせください。

古畑 私は二〇〇一年から二〇一六年までの一五年間、共同通信社の中国語ウェブサイト「共同網」というのを立ち上げからずつとやってきて、当時翻訳で手伝ってくれた房さんとも、それがきっかけで知り合いました。では二〇年前になぜ中国語によるニュース発信を始めたのかというと、三つの理由があります。一つはまずアジアで当時日本がブームになっていたと知ったことです。例えば台湾では哈日族(ハシリウ)、日本大好き族というのが出てきて、日本のポップカルチャーが我々が思った以上に、中国とかアジア圏で非常に人気があるということがわかったというのが一つですね。

それからもう一つの理由として、日中関係が悪化していた、小泉(純一郎)首相の靖国神社参拝等々の問題もあって、どうしても中国では反日というのはすぐ火がつきやすい状態にあった。ですから

日本をより正確に伝えたいという気持ち  
が非常に強くありました。別に日本を宣  
伝しようというのではなくて、さつきも  
話しましたが、悪いことも良いことも  
全部含めて日本という国や社会の姿を発  
信して、そのうえで中国の人に客観的に  
日本を理解してもらえればと思っていま  
した。

もう一つは、当時日本国内で在日中国  
人がいろいろな形で情報発信を始めてい  
たんですね。例えば当時「遣唐使」とい  
うサイトがあつて、上海などにオフィス  
を構えて、日本関係の情報を流してい  
たのですが、やはり一人の日本人として、  
日本のことは日本人がきちんと責任もつ  
て発信すべきであるという気持ちがあり  
ました。別に愛国心というわけではない  
ですけど、日本のことを一番知ってい  
るのはやはり我々日本人なんだから、情報  
発信のイニシアチブをとっていかなくて  
はいけないという、その三つの理由から  
スタートしました。

いろいろな紆余曲折があるなか何とか二  
〇年、私は最後の五年ぐらいは離れては

いますが、続けることができました。た  
だやはり、海外発信というのは非常に難  
しいと思います。例えば、朝日新聞が今  
年の三月で中国語サイトを閉鎖しまし  
た。朝日は一時、中国当局にとって刺激  
的な内容を発信してしまつたことで、中  
国国内から微博のアカウントを停止され  
たりする形でブロックされてしまつた。  
その結果、中国国内で発信するのが非常  
に難しくなつてしまつたので、海外、特  
に中国に発信するときはその辺を非常に  
慎重にやらないといけないと、私もやつ  
ている間感じていました。

しかし、だからといって、別に中国に  
ゴマをするとか媚びる必要は全くなく  
て、日中関係を日本はこう考えている  
と、あるいは日本の一般の人たちは中国  
のことをこう思っているといったこと、  
さらに日本の社会において中国人は、い  
い面も悪い面も含めてどのような形で暮  
らしているのかということ伝えること  
と、「伝えるべきは伝える」ことが重要  
であつて、それは中国にいる人たちも興  
味があるだろうと考えていました。私た

ちが情報発信の対象としていたのは中国  
政府の関係者、日本について政策決定権  
のある人、それからメディアの人、日本  
研究者。そういった人たちになるべく  
わゆる中国語で言う「原汁原味」、つま  
りオリジナルの、中国メディアのバイア  
スのかからない生の情報を伝えたいとい  
うことでやっていました。それは一定程  
度評価を得たと思います。

その一つの例としては、中国メディア  
が日本関係のニュースを載せたい場合、  
大体まず共同の記事を使うんですね。そ  
れは翻訳の手間が不要という理由もあり  
ますが、「日本の共同社によると何々」  
という形で引用する。その結果として  
我々のニュースが中国語のメディアで非  
常にある意味ステイタスを持つてくる  
ということ、それは非常にうまくい  
った面ではないかと思えます。

問題としてはやはり著作権の問題が大  
きいですね。外国のメディアが中国で  
ニュース配信できないといういろいろな  
規制がありますから、結局いくら我々が  
流しても、なかなか中国のメディアから

対価を払ってもらえないという問題があります。中国新聞社などが「日本の共同社によると」という形で記事を載せませぬ、それを今度は中国国内のメディアが転載するというをやります。

だから、冗談のような話があつて、あるとき中国新聞社の東京支局の人が、毎日転載をやっていたんですね。そうしたら北京にいる編集長が怒つて、それはこつちでもやれるから、あなたは外に取材に行けと言つたのです。だからまずそういつた問題が一つあります。

それと、私がこの仕事を立ち上げて、経験で感じたのは、やはり対外発信というのは外交上も非常に重要だということです。英語圏に対しても、中国語圏に対しても、日本を正しく知ってもらう、客観的、多面的に知ってもらおうというのは、パブリック・ディプロマシー（公共外交）の問題として考えなければいけない。しかし、それをやるのは民間ベースではなかなか難しいのです。

中国みたくに、新華社とか中央テレビ、中国国際放送、あるいは人民中国、

そういった海外発信できるメディアに大量のお金を投入してやる、そのやり方が必ずしもいいかどうかは別ですが、これはナショナル・イシュー、国としての課題としてやっていかなくてはいけない、

というのが私の持論です。そのためには例えば企業などを巻きこんだコンソーシアム、企業連合体みたいな形で経費を負担してもらいながら続けるのが得策です。対外発信は、これからの日本の対アジア外交、特に対中外交にとつて非常に重要な手段であるということに、もうちょっと理解を深めてほしいと思つているので、そういう大きな仕掛け作りが自分の仕事の中で、そこまでできなかったというのが非常に残念な点です。

砂山 日本が対外発信を国策としてもつと力を入れなくてはいけないというのは、あまり今までやっていなかったという事です。

古畑 以前ある外務省の方から、本当は私たちがやらなくてはいけないのに、共同通信社にやつてもらつてすいません、と言われたことがあります。

砂山 でもそれが戦前の日本の国策通信社みたいになるのも問題ですよ。

古畑 そうですね。共同の前身である同盟通信社の轍を踏まないようにすることが重要だと思います。

砂山 どういう形で対外発信すべきかというの、中国と同じように日本にとつても問題ですね。日本もパブリック・ディプロマシーはあまり上手ではないなあと感じます。

## 日本で中国をいかに発信するか

砂山 話が前後しますが、房さんは日本で「中国」を発信なさつていらっしゃるわけですが、その際にどんなことを心がけていらっしゃるのでしょうか。

房 私は自分でしかできないことをやるうと思つています。日本のメディアの多くは、中国を批判するために批判しているように私には見えてしまいます。忌憚なく話すと。なんの責任感もない中国報道を見ると腹が立つときもありますし、そういう系統のものが受けてしま

のが事実としてあるので、それはマスメディアである限りなかなか改善できないことだな、いつも残念に思っていることです。

一方で自分は竹内さんのように中国の良さだけを伝えたいと思っているわけではありません。昔の自分は今よりジャーナリズム精神が強かったです。これは問題です、これは駄目ですと、それをやる自分がかつこよくて、エゴの方に向かってしまいそうな感覚が強かったですね。最近、たくさんさんの社会問題がある中国を生きる人たちの姿というものをなるべく深く掘り下げていきたいということですね、一番強いのは、自分の親や、じいちゃん、ばあちゃんたちも含めて、問題が山積する社会を生きる一般庶民はどこに矛盾を覚えて、どこで妥協しているのか、ということ。庶民そのものをやりたいということなんです。

もう一つは、今までも多くやってきたことですけれど、社会問題があります、環境汚染もあります、教育もだめです、すべてがだめです、ということをやりたい

けではなくて、その問題を改善しようとしている人たちがたくさんいるということですね。日本の皆さんが知らないことはたくさんあるし、民放のニュースを見ていると、中国はだめ、問題たくさんありますと言っていますが、その問題の被害者であるのは、中国で生きる人たちじゃないですか。その人たちがどのようにその問題に立ち向かっていって、どんなハードルにぶつかって、それでも彼らはどうのように諦めずにやっているのかということ、その遅しきには自分は本当に



高 明潔 [Gao Mingjie] .....

頭が上がリません。中国国内メディアではなかなか取り上げられないようなことを海外のメディアでやりたいですし、自分がそれをやることで彼らが少しでもやってよかったと思ってくれたら、もう私の使命と言いますか、仕事は完成していると、最近思いますね。今まで視聴者から手紙をもらったこともたくさんあるんですけれど、今までと違う中国の一面が見られたとか、そういう声をもらおうと素直にうれしいですね。

高 私 は鄭琮という女性監督が制作した『出路』というドキュメンタリーを見たことがあります。七年間をかけて、三名の若者の「出路」を追跡するかたちで制作されたもので、一時間半ほどの長編です。二〇一七年に公開されており、いまは *beta* で完全版が見られます。主人公は甘肅省の貧困農村の少女、浙江省の小さな町のごく普通の青年、それに北京の富裕層出身の女の子の三名です。授業で、中国社会の格差の現実を学生たちに理解させるためにこの作品を見せたんですが、中国人留学生もこのドキュメンタ



リーの客観性を評価していました。このドキュメンタリー制作の出発点は、先ほど房さんがおっしゃったことと同じところがあるかなと思いました。

渡辺 いま房さんがおっしゃられたことは非常に共感するところがあります。日本のメディアは国交回復後から一九八〇年代までは市井の人々の姿を伝えていた。しかし、八九年に天安門事件が起こり、また、反日デモの報道もあり、中国が大国化したにもかかわらず、対外的にも強硬な姿勢を崩さず、さらに、中国国内における非民主的な動きが伝わると、報道が政治優先、外交優先になつていく。メディアは市井の人々の姿を伝えなくなつていく。ただ中国だって普通の人たちが普通に暮らしているわけです。

以前、姜尚中さんが、日本人は金正日ですごく悪魔的に描いている。だけども「冬のソナタ」のペ・ヨンジュンには憧れを抱く。日本人は、あの二人が同じ朝鮮民族であるつてことを忘れていないのか、という趣旨のことを書かれました。北朝鮮にも中国にも、市井の

人々はいる。そのような人々の暮らしを伝えたいというのはよくないと思います。

近年私は戦前の日本のことを研究テーマとしており、戦争や軍の記憶を文章にまとめています。戦前の日本人も懸命に生きていた。時代が一定の制約にあつても、人間はそのなかで生きていかざるを得ない。でも、国、民族、ナショナルリズムの問題と、人々の思考は複雑に絡み合っているのです、なかなかスパッと割り切つて考えることが難しいこともまた厳然とした事実です。竹内亮さんがいま活躍している領域というのは、ある意味そのところを割り切つて仕事をしている。解釈によつてはそうとも言えるのではないかと思います。

砂山 この前に竹内さんのインタビューもして、いま房さんのお話も聞いて、日本の場合どうやって中国について発信するのかということの難しさを改めて感じました。例えば中国の社会問題を取り上げて、それを批判的に描けば、それは即、ああ中国はこんなひどいところかというふうに受け取られてしまうし、中国

から見れば、また日本は中国批判をやっているというふうになつてしまつて、先ほど申し上げた悪循環に陥つてしまします。竹内さんは中国の視聴者を主な対象として描こうとするから、日本から見ると中国礼賛みたいな受け取られ方をしてしまつて、それはそれで非常に不幸な位置にあるのかなと思いますね。

竹内さんに、制作にあたり何か制限とか規制とかはあるのかと尋ねたところ、彼は当局からの規制は全然ないと言っています。ところが最後に、じゃあこれからどういう長期的な目標がありますかと尋ねると、そんなものはないと。なぜならば、これまでも本当に綱渡りみたいにやつてきた、何かちよつと日本がいいつて描くと、すぐネットで批判されて、お前なんここで日本の宣伝するんだつて批判されると。だから実は彼も非常に緊張した中で作品を作つていて、規制がないと言いながら、実はネットユーザーからの——その大部分は小粉紅なのですよ——うけれど——批判にさらされているという現実があるわけです。だからどうやっ

たら、本当にお互いの理解を促進するよ  
うな描き方が可能なのかという点が、私  
はメディアの人間ではないですけれど  
ずつとすぐく気になってきました。先ほ  
ど房さんがおっしゃったように、国より  
も人、人に密着して、人が抱える問題を  
描くということが実は共通のベースにな  
るんだということは非常に重要な指摘だ  
と思います。できるだけ国を背景に遠ざ  
けて、それぞれの社会で生きている人た  
ちの問題を描く、その人たちの置かれた  
状況を描くというのが一つの道なんだろ  
うなと思います。

## 最後に

高 まだたくさん語り残したことがあり  
そうですが、時間も尽きましたので、最  
後に一言ずつ各先生方にお話をいただき  
たいと思います。

渡辺 繰り返しになりますが、これまで  
申し上げてきたのは次のようなことで  
す。メディアの産業化、市場化で、コン  
テンツ能力は向上している。ただ、本丸

の報道は党の厳しい管理のもとにある。  
つまり、自由な創作は保障されていな  
い。よって、現代を描くこと、近現代史  
に関わる創作には大きな障害がある。た  
だ技術的な水準は上がっている。これら  
どのように考えればよいのか。

これまで、漫画やアニメ、音楽、ドラ  
マなどのサブカルチャーが日本から中国  
へと輸出されていきました。でも、中国  
人の歴史認識が大きく変わったかとい  
うと、そうとは言えない。むしろそこには  
愛国主義教育の影響もある。やはり、エ  
ンターテインメントの影響力と、政治の影  
響力は切り分けて考えねばなりません。

ただ、中国のクリエイティブ力の向上  
は、中国のメディア産業に起こっている  
端倪すべからざる事実として押えておい  
たほうがよい。また、古畑さんが述べら  
れたようにネットではさまざまな意見が  
読める。同時に当局の指導によるやらせ  
のコメントも多く掲載されている。中国  
のメディアにはさまざまな側面があるとい  
うことかと思えます。そこを複眼的  
に見なければ、事の本質を見誤ると思

ます。

もう一つは、房さんが話をされた「人  
という問題です。どのような地域、時代  
にあっても、人は懸命に生きていくわけ  
ですから、その等身大の姿を描くことは  
ジャーナリズムの果たすべき重要な役割  
だと思えます。そこを日中双方が大切  
していくという姿勢も求められているの  
ではないかと思えます。

古畑 今の渡辺先生の話を引き継ぎます  
けれど、やはり私は日中の関係をよくし  
ていく一番の基本というのは、人間と人  
間のつきあいを保っていくことだと思  
います。これは前からいつも言っているの  
ですが、お互いに日本人はこうだとか、  
中国人はこうだとか、そういう非常に漠  
然と抽象化して相手のことを批判したり  
するのではなくて、王さんはどうだと  
か、高橋さんはどうだとか、そうした個  
人レベルで話の場を作ることが非常に重  
要で、その点でやはりSNSというのは  
大きな力を持っている。私も多くの人と  
微博などを通じて知り合いになって、そ  
れがいまだに友達として続いている人も

います。やはりそういう人と人が出会える場としてのSNSは非常に重要ではないかと考えています。

もう一つは、メディアというのは何が重要かという点、これはメディアに勤めている人間だからいう訳ですけど、インテグリティ integrity という言葉、中国語ではたぶん「公信力」と訳せばいいと思います。やはり、この人がこう言っている以上は間違いないだろうと信じてもらえるような、そういう社会的な評価を確立することが大事で、そういう点から言うと、中国の例えば対外発信の問題としてはちょっとインテグリティに欠けているところがあるだろうと思います。

例えば台湾や香港において、フエイクニュース的なことをやったり、あるいは中国外務省の報道官がアメリカを非常に批判するようなことをツイッターで書いていたりする。そういう戦狼外交をやっていると、インテグリティ、公信力に影響すると思います。どうすれば中国が自分の発信力を高められるかということを考えると、そこを改善する必要があるのでは

はないかと思っています。それは日本にも当然言えることですが。その点がどうしても中国の対外宣伝がお金をかけてもなかなかうまくいっていない一つの理由ではないかと思っています。具体的には自国の宣伝や他国の批判ばかりではなく、自らの悪い点、問題点も認め、発信できるようにするかですが、正直なところ難しいと思います。

房 ドキュメンタリーというのはマスメディアの中ではとても特殊な存在であると思っています。政治や経済などを報道するのがマスコミの基本だと思っているんですけど、その中で、国ではなく個人に焦点を当てるコンテンツというのはドキュメンタリーしかないような気がしています。それを作る人間として何を意識して作るかというのはすごく大きな課題です。自問自答でもあるのですが、自分は果たして本当に「ウケ」というものを狙わずに番組を作れているかと言ったら、まだまだできていない部分がたくさんあると思います。

例えばちょっと前に、中国で生きる黒

人の番組を作ったことがあります。人間の深い部分まで伝えるということはとても困難なこと、とても丁寧な取材をしていかないと難しいことですね。

逆に簡単なのは、中国では黒人差別がたくさんありまして、その差別によって黒人の皆さんがこんなにも大変なことになっていきますよっていうことを言うほうが、圧倒的に簡単です。そうではなくて、中国の人はなぜそこまで差別をしまっているのか、おかしいと声を上げる人もいるとか、そういうことをやるほうがむしろすごく難しく。自分の中でもわかっていても簡単な方に走ってしまうこともただただありますし、それは手腕が問われると言いますか、一メディア人としての良心というか、品位が問われることだと思っております。

砂山 みなさんの話を聞いてつくづく思ったのは、メディアについては誰に向かって発信しているのかというのが、やはり大事だということです。例えば日本のメディアは、中国のことを取り上げ

ても、日本の視聴者に向けて発信するわけですね。すると視聴者の気に入るものを描くということになります。中国だと、例えば中国の戦狼外交で有名な報道官も、結局対外的に発信しているように見えるけれども、実は見ている方向は実は中国の当局者、もつといえれば中国共産党の指導部の方を見て、その評価、受けを狙って発信しているのかなと思わずにはいられません。だから日本のメディアも中国のメディアも相手の国のことを発信する時に、誰に向かって発信しているのか、誰のことを気にかけて発信しているのかなと思います。私のところにも中国のいろいろな宣伝メディアが送られてきますけど、本当にこの人たちは日本の人たちに向かって発信しているのかと疑問に思うことがあります。それは日本側からの発信についても同じことが言えそうな気がします。

もう一点、私がかれまで研究対象としてきた知識人のいろいろな論争では、自由とか民主主義だとか、いわゆる普遍

的価値をどう中国で実現するのかがめぐる論争が多くを占めていました。ところが、ある時期から中国の国内でそういう論争はまったく世論の関心を引かなくなってきたんですね。数日前に、李沢厚という一九八〇年代に大きな影響力をもっていた知識人が亡くなりましたが、ネットでは、もう李沢厚は過去の人という扱いが大部分であった印象です。現在のネットメディアでは、先ほど出てきたような小粉紅が席卷している感じで、どうせ体制派だから見なくていいという意見もあるでしょうけれど、それはそれで一つの言論空間として見たほうがいいのではないかと思っています。自由とか民主主義とは別次元で展開されている言論空間をどのように分析するかというのは、ずっと私にとつての課題です。今の中国のネチズンが何を問題にし、どのように議論しているのかに、もう少し注目したほうがいいなと思っています。例えば、トランプ政権に対する見方というのは、中国では左右の立場の違いを超えて支持する根強い声があります。その中に

どういう真実があるのかというのを、私としては探っていきたいと思っています。

高 私は司会ですが、先ほど砂山先生がおっしゃった話に関連して、二点申し上げさせてください。一つは私は教育というものも実際はメディアであると言いたいのです。教育とメディアは両方とも媒介だと思えますから。ということは、我々教壇に立つ者も、メディアと同じように誰に向けて何を発信するのかということ問われていると思います。私は愛知大学の現代中国学部という日本で一つしかない学部の教員として、中国という材料に基づいて、誰に——もちろん学生に対してですが、学生の中には中国人留学生や韓国人留学生もいます——、どういう立場、どういう認識に立って発信するのかについて、私自身、常に考えてきました。そのため、メディアの専門ではないのですけど、メディアにかなり関心を持つようになってきました。

それから、中国のネット世論の現状をどう見ればよいか、という問題ですが、

ネット世論の中心になっていく若い世代は、年代的にも、社会階層的にも多様で、単純に愛国心を重んじるイデオロギー的な小粉紅たちにひと括りにして見るわけにはいかないと思います。彼らの世論はもつと多元的なものとして見るべきだと思っています。

他にも先生方にはまだまだお話ししたいことがありますが、時間が尽きました。本日は貴重なお話をうかがうことができ、また重要な論点を提起していただきました。どうもありがとうございました。

### 注

- 〈1〉一九九〇年代以降に生まれた民族主義的傾向の強い若者で、「未熟な共産主義者」という揶揄を込めて「粉紅ちゃん」と呼ばれる。
- 〈2〉二〇〇六年、中国の歴史教科書を批判した袁偉時中山大学教授の文章を掲載したため停刊を命じられた。
- 〈3〉新型コロナウイルスの流行にいち早く警鐘をならした武漢の医師。自らも感染して死去した。

〈4〉 ネットを使って多数のユーザーが人物や事件について情報を検索し、人物の名前や所属を突き止めたり、事件の真相を明らかにしたりする行為。

〈5〉 「歩み出る」という意味で、中国企業の海外直接投資戦略を指す。

〈6〉 二〇一二年に中国中央テレビが制作した全七話のドキュメンタリー番組で、中国各地の伝統料理をその風土や文化とともに紹介して、好評を博した。

〈7〉 朝鮮戦争において中国人民志願軍が国連軍と初めて交戦した戦いを描いた二〇一一年の中国映画。興行収入歴代一位を記録した。

〈8〉 一九八四年のデビュー作『黄色い大地』で国際的に注目され、『さらば、わが愛・霸王別姫』でカンヌ映画祭パルム・ドールを受賞するなど、中国の「第五世代」を代表する映画監督。

〈9〉 一九三〇―二〇二一年。思想家、美学者、元中国社会科学院哲学研究所研究員。

(二〇二二年一月五日オンライン開催)

